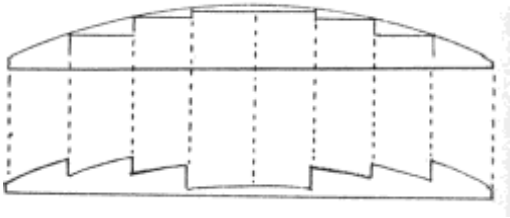
27　カードルーペでーー軽さを生かしてーー

オーバーヘッドプロジェクター（ＯＨＰ）には，フレネルレンズが使われている。これは，大きなものになればなるほどレンズが厚くなるため，屈折に関係のある曲面部分だけを残すことによって，薄く，そして，軽くしたもので，図のような断面をもっている。



このようなフレネルレンズが「カードルーペ」などと称して市販されていることに気づいたのは，昭和 50 年代初めのことであった。薄くて軽いという特徴を生かして，携帯用に使われ，今では書店などでも販売されている。

これを，使った授業に出会ったのは，昭和 58 年 10 月に行われた奈良県立七条養護学校での校内授業研究のときで，指導者は水口頼子先生であった。この学級，中学部２年Ａ組は，１名を除いて腕を自力で上げることが難しいという進行性筋ジストロフィー症の生徒４名の学級であった。

先生は，この学級でカードルーペの軽さ（5.4 ㎝×8.5 ㎝で２ｇ弱である）を生かして，ミミズの観察に利用されていた。

生徒は，適当な大きさで軽くて持ちやすいカードルーペを使って，ミミズの運動の仕組みの究明に取り組んだ。そして，一人一人が，ミミズの体に手を触れ，ルーペで生きている動物をじっくり観察する作業に取り組んだ。

ミミズの体を押さえて「ミミズの体はフワフワ」と言ったＵ君，ミ

ミズの前から後ろに手を滑らせて「ミミズはヌルヌル」と言ったO君，逆に手を滑らせて「ミミズはザラザラしている」と言ったK君。これら３つの直接経験を通して，ミミズの剛毛（あるいは硬毛）の存在に気づき，その運動の仕組みを追究していった。

当時，同校は，昭和 58・59 年の両年度にかけて，奈良県教育委員会の指定を受け，「病類や障害の多様化に応じた教育課程の編成と学習意欲を高める指導法の研究」をテーマに，小・中・高等部の 50 人の教員が一丸となって研究を進めているところであった。

カードルーペの特徴を生かしたこのような学習の展開，これが上のテーマに即した実践なのである。「一人一人…」は，どこでも聞かれ，こうした言葉を含む研究テーマは数多いが，それが言葉だけであってはならない。日々の指導に具現化されなければならないのである。